

明治家 実業列伝⑤

増田 繁幸

仙台市博物館 市史編さん室長 菅野 正道



七十七国立銀行の誕生

明治維新後、政府はそれまで藩が武士たち（士族）に与えていた家禄を打ち切り、代わりに金禄公債と称する金融証券を与えました。これによって士族は定期収入を絶たれ、経済的に自活することを余儀なくされました。

一方で政府は、近代経済を支える金融機関として銀行の整備を進めようとしていますが、そこで注目されたのが金禄公債でした。金禄公債の額面総額は、当時の国家予算の三倍にも及んでおり、金禄公債を現金化しようとする動きが大量に出ると、経済が大混乱に陥る可能性を秘めていたのです。そこで金禄公債を銀行の資本金に充てることにより、一石二鳥の効果を得ようとしたのが日本の国立銀行制度でした。

宮城県では、明治十（一八七七）年に第



名取市高柳の多賀神社境内に残る増田繁幸の顕彰碑

繁幸は藩のためには新政府と和平すべきと考えを転換します。ついに仙台藩が降伏した際、繁幸は和平交渉の責任者となり、その後も戦後処理の実質的責任者として、変革期の政治の立て直しに手腕を発揮したのです。

地域へのまなざし

明治四（一八七二）年、廃藩置県によって仙台藩が廃されると、増田繁幸はその行政手腕を買われて一関県（後に水沢県、磐井県と改称）の長官に任じられました。在任中の繁幸は、とくに小学校教育の推進、医療の充実、産業振興に力を入れました。産業振興では、養蚕・生糸生産の奨励、畜産の振興に特に力を入れたと伝えられています。

明治九（一八七六）年、磐井県が廃され岩手県、宮城県に分割併合されると、繁幸は官を辞し、名取郡高柳（名取市）に隠棲し、もっぱら農業を営むようになります。しかし、増田の手腕はまだまだ必要とされ、前述のように七十七国立銀行の創設にかかわったのを皮切りに、その後政界にも進出し、県議会議員になるとすぐに議長に就き、さらに衆議院議員、貴族院議員を歴任しました。

政治家としての繁幸については、とくに戊辰戦争前後の挙動に賛否両方の評があります。一方で、地元の高柳では、繁幸は村人たちから大きく評価されました。繁幸が実践した養蚕の普及、馬や鶯鳥の飼育、茶・葡萄・梨の試験栽培、害虫駆除、馬耕などは、農業改良を地域振興に結び付けようとする試みでした。繁幸は明治二十九（一八九六）年に七十一歳で没しましたが、没後三十年余を経て、村人等は凶作に苦しむ中で繁幸の顕彰碑を造りました。繁幸の地域貢献に対する地域の思いを物語るエピソードと言えるでしょう。



明治36（1903）年、七十七銀行は芭蕉の辻に本店を新築した（現在の日本銀行仙台支店の敷地）。ドーム型の特徴ある三階建ての建物は、仙台の近代経済の象徴であった。

仙台市史

好評発売中

通史編6 近代 1

明治時代の仙台 近代化とそのくらし

◆A5判 520頁 オールカラー ◆定価3000円（本体2858円）

お求め先 県内主要書店・仙台市博物館/株式会社宮城県教科書供給所 TEL.022-235-7181 FAX.022-235-7183
お問い合わせ先 仙台市博物館市史編さん室 〒980-0862 仙台市青葉区川内 26 番地 TEL.022-225-3074